

本論は、近世地誌を日本文学史上に置き直すための、基礎的作業を集成したものであり、近世地誌論の序説とも言い得る。その内容と方法は以下の様である。

まず序論において、先行研究を整理した上で、地誌を文学として捉えること、あるいは近世の人々がそれを文学と同等に受容したとする仮説を提示し、主として所謂「文学性」が失われた近代地誌との比較により、捨象され臙化された要素が、詩歌と歴史叙述に象徴される情緒・情趣と指摘して、近世地誌が、理知と情緒が混在していた広義の「文学」と同列にある由を述べた。

続けて実際の近世文学作品に表れる地誌の利用や、地誌に擬した文学作品の事例を列挙・検証した上で、近世文学特に十八世紀以後の江戸文芸に、地誌が無くてはならない存在であったことを確認したのち、それを踏まえて本論の構成を示して、本論が対象とするのが、江戸文芸誕生前夜の享保期前後の民撰地誌であること、その中でも俳諧との関係に着目することを述べた。

そして、その根幹に享保期の俳諧師菊岡沾涼とその作品を据え、その前段階として元禄期の幕府御大工頭鈴木長頼（号、秋峰）を検討し、享保以後の動向を対象とする論考を最後の二章に配する見取り図を示した。

第一章では、鈴木長頼の文事と交遊関係を整理した。その結果、元禄期の地誌作者の和漢雅俗に渉る幅広い交友と、思想背景に風雅の師たる幕府儒官人見竹洞をはじめとする、林家の詩文があることを確認した。また、その著作には、当時の学芸界の動向を反映して、中国・朝鮮の事物・風俗と本邦のそれを対置することで自己認識をはかる、所謂「和漢同轍」思想が反映していることを指摘し、特にその朝鮮への眼差しから、林家にとどまらず、貝原益軒などとの思想的共通性の可能性を推論した。

第二章は、その鈴木長頼による地誌作品『豆州熱海地志』（元禄十三（一七〇〇）刊）を分析し、人見竹洞の紀行文などを利用して構成されていることを指摘・例示し、後続の様々な熱海地誌類に利用されることで、林家周辺の知識が幕末・明治まで影響力を保った事実を明らかにした。

第三章（第七章）には、先述の菊岡沾涼についての論考を置いた。

第三章において、地誌作者菊岡沾涼の、本来の活動である俳諧師としての文事を年譜形式で整理し、既に指摘のあることながら、俳壇での孤立の実態や、時代に逆行する蕉風への接近を確認したほか、これまで明らかになっていなかった伝記的事実を多数加えることができた。

続く第四章では、沾涼の著作活動の初期を飾る絵俳書三部作を、書誌情報を中心に詳細に検討し、絵師・句作者・題材などから、享保時代の都市江戸発展を寿ぐ姿勢、すなわち後年の「江戸じまん」の萌芽が見えることを指摘した。また、近世の絵俳書史における位置を考察し、露月がこれを引き継ぎ、幕末まで継続する享保以後の絵俳書の様式を整えた意義を論じた。

江戸俳壇の歴史を俯瞰・整理した俳諧系譜『綾錦』（享保十七（一七三三）刊）の全貌に迫る第五章は、あまりの煩雑さに見過ぎられていた諸本検討を行い、同書の近代にまで至る盛行ぶりを論証するとともに、未発見であった初板本と、さらにその古体を示す写本の存在を明らかにして、明確な系統立てを行った。前章とあわせて沾涼の卓越した企画・編集能力を見ることができ、それは地誌・説話集編纂に通ずる点があつて、その解明のためにも俳諧活動の整理は欠くべからざる前提と言い得よう。

そして、第六章・第七章ではそれら俳書の刊行を経て成された地誌・説話作品について論じている。

第六章で採り上げた『諸国里人談』（寛保三（一七四三）刊）・『本朝俗諺志』（延享四（一七四七）刊）は、場所・時代などの情報に正確性を期す姿勢を見せる諸国奇談説話集で、類似書との比較から、教訓的言辞のような主観的描写をほとんどたないという大きな特徴を見出し、典拠として自作の紀行文や地誌があることを解明して、この特

色が〈地誌性〉の付与とも見ることができると指摘した。また、この編纂姿勢が、享保当時の幕府が進めた全国の産物把握とそれに伴う書物編纂（たとえば丹羽貞機ら編『庶物類纂』（延享四成）など）と軌を一にしていることから、その理論的背景にもなった荻生徂徠（寛文六（一六六六）〜享保十三（一七二八）年）らによる思想の民間での発現とも位置付けられることを述べた。

続いて第七章では、『里人談』・『俗諺志』に見える〈地誌性〉の直接的要因たる編纂資料の一つ、自筆稿本『熱海志』について考察した。故実考証家として名高い喜多村信節が当時の菊岡家で寓目しており（『筠庭雜録』（天保三（一八三二）以降成か）、後裔によつて秘蔵されていたとおぼしい。沾涼が熱海を訪れた際に筆をとったもので、先行する熱海地誌や後続作品との比較によつて、その特徴を明示するとともに、その翻刻を付載した。

第八章〜第十章には、これまでの章で述べてきた内容を補強ないし相対化する論考を配した。

第八章は、沾涼と同じ江戸座の俳諧師露月^{ろげつ}（寛文七（一六六七）〜宝暦元（一七五一）年）による絵俳書、『名物鹿子』（享保十八（一七三三）刊）を分析し、江戸名物類聚の史的展開における位置付けを行つた。土地のアイデンティティを象徴する「名物」の集成も、地誌編纂と極めて近い発想に基づく営為であり、それが俳諧の枠組みに拠っているのも近世的と言ふことができる。本書を絵師・題材の面を中心に検討することで、本書における江戸のあらゆる事物の網羅が、享保期の江戸文化の隆盛を如実に示すものだということを確認した。

主に元禄から享保にかけての分析を続けてきたが、第九章では化政期（十九世紀初）の俳諧師の手になる写本地誌・説話集『風流江戸雑話懷反古』に着目し、それが包含する『江戸砂子』などの江戸地誌が語ってきた土地の物語の系譜の整理・概観を行つた。そのことにより、前代の沾涼たちの地誌編纂の客観的位置付けが可能となり、また、芭蕉顕彰運動と名所生成の問題のように、時代相を反映する現象も見られ、新たな俳諧と地誌の関係を示す点にも言及した。

最終第十章は、やや時代が前後してしまふけれども、宝暦期の大坂書肆吉文字屋市兵衛が行つた地誌の改題・再編成の実態に迫つた。『東国名勝志』（宝暦十二（一七六二）刊）と元禄期の地誌の関係について述べたもので、民撰地誌の受容・利用・循環をめぐる考察である。なお、吉文字屋市兵衛は第七章でも触れるごとく、沾涼と彼の著作に着目して類似作の刊行や求板も行つていて、江戸と上方の出版界の関係を考える上でも重要な存在であることを指摘した。

結論において、本論で論述した内容をまとめ、今後の課題と展望について示した。